
Mermaid princess ~ 初恋の相手 ~

。 + 蝶。 +

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mermaid princess 〈初恋の相手〉

【Nコード】

N4560Z

【作者名】

。 + 蝶。 +

【あらすじ】

『またあえたら、唯ちゃんにちかうよ！ぼくが唯ちゃんをおよめさんにもらう！』

懐かしい声。それは初恋の声。
アナタはいまどこにいるの？

会いたい。昔の約束を果たして欲しい。

アタシはいつまでも待ち続けたい。
でも、それも難しいかもしれない。

会いに来てよ。

そうしてくれないと、アタシ『さびしい』から――。

15年のときを越えて。

甘酸っぱい恋がいま、動き出す――。

M e r m a i d 1 思い出の男の子（前書き）

またまたオリジナルです！

読んでくれるとうれしいなあ

M e r m a i d 1 思 出 の 男 の 子

『またあえたら、唯ちゃんにちかうよ！ぼくが唯ちゃんをおよめさんにもらう！』

「唯架あ〜？」
「なんや？朱湊。」

ウチは18歳。名前は千秋 唯架。
将来、小説家が歌手になりたい高校3年生。

「明日さあ、合コンいかへん？」

この子は、宮田 朱湊。
生まれたときから一緒に幼馴染でウチと一緒に歌手になるうちゅう

のが夢らしいわ。

ウチは大阪生まれの大阪育ち。もちろん朱湊もや。
やからずっと関西弁。簡単に言えば大阪弁やな。

これから、ウチはなにが起こるかこん時はなんも知らへん。
ウチは精々、皆さんがこの物語を読んでくれるのを願うばかりや
な。

M e r m a i d 1 思い出の男の子（後書き）

感想等お待ちしております。

あと、短編集のリクエストもお待ちしております

M e r m a i d 2

「宮田朱湊です」

趣味は料理で将来は唯架と歌手になりたい高2です」

「千秋唯架です」

趣味は読書とピアノで将来は歌手か小説家になりたい高2です

」

自己紹介が終りとうとう自由時間になったんやけど・・・

「ねえねえ唯架ちゃんって好きな人おらんのお？」

「い、いませんよぉ。」

「じゃあさ僕と付き合わへん？」

「ええゝ、そんないきなり・・・」

「いいなあ俺も付き合いたいわ！」

なぜか、ウチがつかまってもうて・・・

「大丈夫やった？えっと・・・唯架ちゃん、だっけ？」

「あ、ありがとう。えっと・・・」

「早乙女一樹さおとめ かずきっていうんだ。」

「へえ、早乙女君ありがとう。」

「ねえ、もしかして附属高校？」

「うん、街宮大附属高校だよ？」

「じゃあ同じ学校やないか！」

「じゃあ。また会う？」

「うん。俺、2・D。」

「ウチ、2・C。なんや近かったんやな。」

「じゃあ会えはまたね。」

「うん！」

「こんとき、ウチはなんだか懐かしいような気がした。」

Mermaid3

「ふふ〜ん♪結局唯架はつくれんかったんかあ か・れ・し・♪」

「んもう！やめてーな。恥ずかしいやないの！」

そんとき、

「千秋い〜。お客さんやでー！イ・ケ・メ・ン・の！」

「ちよつといい加減にしてくれへーん！？
んもう。」

そこにいたんは、

「よつ 早速きたったで（笑）」

「さ、早乙女君？」

そ、早乙女一樹君やった。

「なんやあ〜？彼氏か！？」

「ちよつ峰！彼氏やないし、てかふざけんのもいい加減にせんと・
」

峰、後ずさり・・・。

「わっわるかったて。もういいません。」

「よろしい。」

屋上。

なんとか逃げてきました（汗）

「なあ。なんで峰。後ずさりなんか・・・。」

「あああれ、アレはウチが弓道道場の主の娘やからよ。」

「弓道？唯架ちゃん。弓道やってんの？」

「んまーね。部活も弓道部だよ？」

「ほお、俺、剣道やってんねん。」

おりよりよっ

予想外やったわ。でも。かつこいい。

「つてことは朱湊知つとるんやない？お兄さん、剣道やってはるから……」

「苗字なんなん？」

「宮田やけど。」

「ああ！知つとる！強いんだよなあ。憧れるわ。」

「そうそう、あつよかったらウチ来て見る？ウチ、弓道、剣道の道場やから。」

朱湊のお兄さんの橙哉^{じゆう}さんもそこやし。今日来るよ？」

「行く行く！絶対行く！」

「うふふッじゃあ放課後。部活終わったらメール頂戴？メアド教えとくから。」

「おう！」

ウチらはとりあえずメアド交換して、教室に戻ったんや。

M e r m a i d 4

パシyunッ トスツトスツ

ここは、とっても、綺麗なウチの道場。
いまは稽古中で人がぎょうさんおるんや。

「ただいま、みなさん。」

「「「お帰りなさい！唯架嬢！」」」

ダダダダッ

「ただいま、みくに美国、じん陣、ひむろ氷室。」

この三人はウチの付き人。
というか、身の回りのお世話はこの三人がするんや。

「お嬢。その男誰なんですか？」

「ああ、D組の早乙女一樹君。朱湮のお兄さんに会いにきたのよ。」

「よろしゅうお願いします。」

「ということとは剣道やつとるんか？」

「まあ一樣。」

そんなとき、

「こんちわー！」

噂をすれば・・・

宮田橙哉が表門から入ってきた。

「あつ橙哉先輩！」

「おおこんちわ、唯架。どーしたんや？」

「D組の早乙女君が橙哉先輩に会いたいそうで・・・つれてきちゃいました（笑）」

「ほお、おつ早乙女つて早乙女一樹のことか、久し振りやな。大会以来やな。」

「そーっすね、久し振ります。」

「そうやつ！丁度いい。お手合わせ頼みましょか？」

「いいですよ。持ってきてますから。」

こんなかんじで（ウチはぜんぜんついてないけどな・・・）
早乙女君と

橙哉先輩の手合わせが行われた。

バンッバシンッ バンバンッ

「メーーン！！」

「ドウッ！」

2対2のいい勝負。

次、どちらかが打てば勝者が決まる。

でも、このとき唯架は二人がどうしてこんなに必死に戦っているのか
まったく知らなかった。

M e r m a i d 4 (後書き)

次回、二人の必死な勝負の理由がわかります♪

次回をお楽しみに！

M e r m a i d 5

「・・・メーーーーーン!!!!!!!!!!」

勝負は付いた。

早乙女君が勝った。

「ありがとうございます!」

二人ともいい勝負だった。

どっちとも強かった。

「ただいま、いま手合わせしたんは誰かしら?」

こんとき、部屋の向こうのほうから3人が駆けつけた。

「お帰りなさいませ! 梓お嬢!」

「ただいま、凜、嵐、透。」

いまの梓お嬢っていうのがウチのお姉ちゃんの千秋梓。

ウチの道場の3代目当主。あ、1代目はおばあちゃんで2代目がお父さんな。

「梓姉ちゃん、おかえり。」

「ただいま、唯架。」

んで、この『凜、嵐、透』が梓姉ちゃんの付き人。

んまあ、ウチのお付と姉ちゃんのお付のうち、凜と氷室が大学生まあ成人。

あとの嵐、透、美国、陣の4人は私と同じ高校の生徒。まあ学年がそれぞれだけど。

「じゃあ、そろそろ俺帰るわ。」

早乙女君は荷物をまとめた。

「そっか。じゃあまた明日学校であつたらね。」

「ああ。じゃーな。」

早乙女君はいつてしまった。

「じゃあ私は温泉おふろにいつてくるから。あとはよろしくね、氷室、凜。」

「はい！お嬢。」

Mermaid 6 氷室と凜のわからないことご説明コーナー

はいっ

ここでおまけのわからないことご説明コーナー!!

私、氷室と・凜がご紹介しまーす! あ、ちなみに凜は男だぜ!

ではでは早速・・・

(図鑑係式ですのでこれからはよろしくお願いします! 上の

『氷室と凜のわからないことご説明コーナー』というので
ていたら

おまけか図鑑形式です)

!! Q

!! A

梓の言っていた温泉とは!?

千秋家の横には温泉旅館『千秋』があります。

千秋家は先祖代々この温泉の女将などをしてきました。
いまの女将は梓お嬢と唯架お嬢のお母さん。

若女将は唯架お嬢です。

上の旅館の付き人6人の担当係は！？

凜Ⅱ接客《老女担当》 氷室Ⅱ接客《全般的。予約の受付》
透Ⅱ接客《笑顔で和ませる担当、男女問わず》
陣Ⅱマッサージ《お客のリラックスコース》
美国Ⅱ芸事《コース、または宴会の場》
嵐Ⅱ食事《お客様へのコース料理が得意》

です。

千秋家の家系図って！？

千秋 沙織さおり 母
千秋 草庵そうあん 父
千秋 木暮こくれ 長男
千秋 梓あずさ 長女
千秋 唯架ゆいか 次女
千秋 京華きょうか 末女

母方の家族

蘭田 日和ひより 祖母
蘭田 浩太郎こうたろう 祖父

父方の家族
千秋 仙蔵せんぞう 祖父
千秋 柚子ゆずこ 祖母

です。

こんな感じです

わからなければ、このお話の作者『三月 亜莉棲』にメッセージ、
または感想で
お伝えください♪

氷室&凜

Mermaid 7

「お、おはよう・・・。」

「おうつ！おはよう唯架ちゃん」

なんでウチがこんなに同様してるかって？

そりゃあ、家の前にリムジンで現れたんやから同様せん理由^{わけ}ないやろ！！

しかも、早乙女くんスーツやし・・・

「あの・・・なんで？」

「唯架ちゃんのお母さんに用があるんだ。いまいいかな？」

「ちょ、ちよつとまってて。」

タタタタタッ

バンッ

「オカン！お客さんがリムジンで・・・。」

「へっ？ど、どういこと？」

「やから、オカンに話あるからいまええかって！ウチの友達^{ともだち}の早乙

女君って子なんやけど・・・」

「さ・・・早乙女えええええつ!!」

「ど、どないしたん？」

「はよう中にお連れして!はよう!」

「は、はい。」

というわけで、早乙女君を招き入れたのですが・・・
いったいどないしたんやろか？

M e r m a i d 7 (後書き)

次であっ詳しくわかると思います・・・

次回もお楽しみに!!

M e r m a i d 8

「失礼します。」

「ど、どうぞ。」

ガラッ

「お、おかけになって。」

「あの、今日は何の御用で来たのかしら？」

早乙女くんは顔色ひとつ変えず言い放った。

「じつは、父から頼まりました。」

父はここを買収したいそうです。」

「「ば、買収っつー!!」」

ドサッ

「ゆ、唯架!? いける? 大丈夫?」

「こ、腰ぬけてもうた・・・。」

「とりあえず座り。で、なぜサオトメホテルが旅館^{ウチ}なんかを買収に
?」

このとき、

ウチはあれっ? と思ったんや。

やって、早乙女くんの家のことサオトメホテルで・・・

買収? どゆことや?

「ちょ、ちょっとまって！早乙女くん、まさかホテルの御曹司やないよね!?!」

「ううん。唯架ちゃんの言うとおりや。」

早乙女くんの言い方はあまりにもさっぱりしていた。

そして、こんなときからウチは早乙女くんの本心がわからなくなり、そして商売敵になり、信じる事が出来なくなってしまった。

Mermaid

「そう、そうやったんや！」

「ゆ、唯架？」

オカンは同様してる。

「早乙女君は旅館^{ユウイン}の買収のためにウチに近づいたんやろ！
橙哉さんに会いたいとか言ってウチの道場に来たり！なんで人を
裏切るようなこと・・・う・・・っ・・・ふえ・・・！」

パシンッ

唯架の手は一樹の頬を叩いた。

そして、唯架は頬に光る涙を流しながら部屋を後にした。

でも、唯架にはわかったことがあった。

それは

『自分は早乙女一樹が好きだったという』

悲しくももう、信じることの出来ない出会いを思っしかなかった。

「ねえ唯架、もういいでしょう？そろそろ学校行きましょう？」

「やだ。」

母はあきれ気味だ。

あんなことがあってからもう4日間、学校にも行かず、ご飯を食べ
て温泉に

入ったら部屋にこもり、その繰り返し。

お付きもみんな心配で疲れ気味。

梓のお付きは唯架のお付きがいつ倒れてしまつかと心配だったほどだ。

「大丈夫かしら・・・唯架。」

「お嬢、話してみますか？唯架お嬢と。」

「うん、そっとしておいたほうがいいと思うもの。
行きましょう。昂すほうがまつてるし・・・」

「そうですか。いつてらっしゃいませ、お嬢。」

「いつてきます。」

梓は家を出た。

昂すほうとは京椿 昂すほうという

京椿温泉旅館&ホテルの御曹司。

そして、梓の幼馴染であり彼氏。

唯架とも昔からの付き合いで仲がいいし

梓はいつも唯架が落ち込むと相談している相手。

今日も梓は昂に頼ることになってしまいそうだ。

M e r m a i d 1 0

「唯架ちゃんが？」

「そうなの。」

ここはとあるカフェ。

梓と昴の行き着けの店である。

「でも、なんか俺たちと似てるな。」

「えっ？あ、でも確かに・・・」

梓と昴の両親はある事がきっかけでお互いを嫌っていた。

梓は母に言われ昴にすべてで勝るよう、教育を受けたがすべて失敗が続けていた。

でも、あることが理由で昴が梓にアプローチ。

梓も昴が好きだというキモチに気づき、二人はこっそり付き合う。

そんななか、たくさんの困難を切り抜け、二人は来月結婚予定だ。

20歳という若さで結婚。

大学側も驚いたが了承してくれた。

そんなこんなで二人はラブラブなのである。

唯架と一樹も同じようなことだ。

梓は一樹が唯架がすきで旅館を買収しようとしているとわかっていた。

そして、同じことをした自分の彼、昴も同じように思ったのだろう。

「どうすればいいと思う？ 静かに見守るのがいいのかしら。」

「そうだね、そのほうがいいよ。あとは唯架ちゃんが一樹君へのキモチに気づいているかなだね。」

「多分、気づいていると思うわ。」

「じゃあ、大丈夫だよ。俺たちみたいに仲は戻るさ。」

「だといいわね。」

梓と昴の思いは唯架のココロにとどくのだろうか。

いまはそれを、静かに待つのみだ。

M e r m a i d 1 1

ここは京椿ホテルの温水プール。

そこで泳いでいるのは人魚。否、唯架である。

休みで一日中暇な唯架。友里恵も篤朗とのデートだということ
で遊べなかった。おかげで今日は一日中一人だ。

スイーッ
ー

唯架の泳ぐさまは人魚のようだ。

そこへ、ある人物が入ってきた。

『そうですけど・・・でも』

『弱虫だな。がんばってアタックしろよ！好きなんだろう？。。が・
。。』

唯架は男性二人が入ってきたのはわかったが泳いでいたため誰かは
わからなかった。

梓はちょうど飲み物を取りにプールにある付属のバーに行っていた。

唯架は男性が恋バナをしているのに気づき誰か確かめようと
隠れて聞いていた。

『お前、それでも男かあ。ってかお前の父さんすげーな。
大女将が好きで買収なんて・・・で、お前が行ったのは。。のた

めだろ?』

毎回、名前を出そうとすると見つきりそうになり温水の中に入って名前が聞き取れない。

困っていた。

そして、その名前をとつと聞き取ることができた。

『で、これからどうするんだ。』

『彼女が気づくようにがんばります。』

『唯架ちゃん、気づくといいな』

そう、自分だった。

M e r m a i d 1 2

次の日ウチは早乙女君にあった。

彼がいつもいた、海辺のカフェのラウンジ。

こちら辺は海が近いからそういうカフェが多いんやけどいつも、彼はその決まった席に座っていた。

「早乙女君。」

「ゆ、唯架ちゃん」

早乙女君は驚いたようだった。

ウチは率直に話し始めた。

「ねえ、ウチラ昔なんかあったん？」

彼は答えない。

「聞いとる？むか「わかんねーのかよ！」

あたりには誰もいなかった。

誰もいないせいか、早乙女君の声がよく響いた。

「俺はずっとまってるのに・・・それでも・・・」

ダッ

「さ、早乙女君!」

早乙女君はどこかにいってしまった。

でも、ウチは早乙女君が何を言っているのかぜんぜんわからなかった。

M e r m a i d 1 3

学校 - - - - -

「おはよう。」

「おはよー！唯架。あれっ？どうかしたん？」

幼馴染の澤田^{さわだ} 美夕^{みゆう}が問いかけた。

「えっ？」

いつもと少ししか変わらない唯架普通誰も気づかない唯架の変化を美夕はすぐにわかってしまう。彼女のいいところのひとつだ。

「美夕には、かなわんなあ・・・わかった。話すわ」

その日の放課後唯架が下校中にすべてを美夕に伝えた。

「そうやったんや。でも、その《ずっとまってる》ってなんか意味があるんとちゃう？

思いだせんのか？」

「私の昔の恋愛関係の記憶って《唯ちゃん》の話しか覚えとらんのか。しかも

そんなときの男の子の顔はばやけとるし・・・」

「そっか・・・でも、そのうちわかるわ。大丈夫。大丈夫や。」

そういわれた、唯架だったがココロには不安が募るばかりだった。

M e r m a i d 1 4

『唯ちゃん、俺もう一緒には入れないんだ。
ひとりで、がんばってな。』

『ま、まってえ！名前教えてーな！
あんたの名前、なんなーん！？』

バツ

ピ。ピ。ピ。ピ。ピッ

「夢、か・・・」

最近、いつもこうだ。

同じ夢、同じタイミングで目覚めてしまう。

「続き・・・また聞けんかった。」

「おはよう。」「おはよーさん。あれっ？千秋。どーかしたんか？」
峰が話しかける。

「なんでもない。」「お、おう」

なぜか静かな唯架を見て『いつもの威勢はどこへいったんや？』と
峰はかしげる。

「今日は晴れの日なんに。どないしたんや？」

そこに美夕が言った。

「唯架はな、悩みがあるんや。こんな日について思うかも知れへんけど
清人、そつとしときーや？」

「お、おう。やけど、悩みがあるんやったら今日中に片付くとえー」

なあ。

今日は終了式なんにな。春休み終わったらもう、大学生やで？」

「そやなあ。大学生になっても悩みがあるっちゅうのはちょっと・・・」

この二人の会話、聞いているものは数多くいたが、そのなかに、早乙女一樹がいたこともたしかだ。

M e r m a i d 1 5

「皆、冬休みで受験があつたため受験勉強に励み、なかなか羽を伸ばすことはできなかったでしょう。この春休みで努力を胸にしっかりと羽を伸ばし、残りの学校生活を大切にしましょう。」

校長の話が終わった。

『生徒代表の言葉。代表、早乙女一樹。』

代表、早乙女一樹。

それが決まったのは、1週間前。

+ 1週間前 +

『すまんなあ、こんな時間に。』 『いいえ、大丈夫ですよ。ところで』

『ああそうだったわ。終了式の代表の言葉、お前にまわせなかった。』

『えっ?』 『すまんなあ・・・毎年やつてもらつとるのに。』

『じゃあ代表って誰なんですか?』

『早乙女一樹うちゅー男子生徒や。』

+ 戻って・・・ +

「・・・ます。代表、早乙女一樹。」

ぱちぱちっ

拍手が振りまかれた。

『次は、母校生代表の言葉。』

ザワザワッ

あたりがザワついた。この学校の風習である。
毎年、こういう風に現れて2人の男女が言葉を述べ、式の終わりに
までいる。

コッ コッ

台の上に上がってきたのは、

『今年の代表、高雅女子大学《千秋 梓》。森が丘大学《宮田 橙
哉》。』

「お兄ちゃんっ!」「お姉ちゃんやっ!」

朱湮もウチもうれしかった。

だってこの代表として出れるのは超のエリートなんだもん。

このうれしいハプニングのおかげで唯架は悩みのことをすっかり忘れていた。

M e r m a i d 1 5 (後書き)

もうそろそろですね。

また橙哉先輩と一樹の手合わせの話が帰ってきますよ(笑)

まあ大体の人は想像膨らませたらわかつちやうかな？

完結までよろしくお願いします！

Mermaid 16

「じゃあ今日はケーキバイキングの券。もらっちゃったの？」

「そうっ！だから行かない？美夕と峰誘ってさっ！男子一人ってかわいそうだけど・・・」

「んじゃ、俺入れるよ。」

うわっ！ッといわんばかりに飛び跳ねた朱湊にびっくりして、唯架も飛び跳ねた。

「なーんだあ。お兄ちゃんやないの・・・びっくりするやん。」

「わるかったな、峰は？」

「あ、じゃあウチ美夕たち探してくるっ！」「」「いってらっ」

そんな感じで呼びに行ったんやけど・・・

『まぢか・・・／＼／』 『だから何度も言ってるでしょっ！スキだつて。』

そ、ウチは美夕が峰に告つとるところ見てしもうてん。

しかもそのあと・・・

『俺もやった。お前がスキや。』 『ほん・・・』

あれっ？っと思ってこっそり除いたら・・・

ありゃりゃ・・・峰と美夕がキスしとったんよ・・・。

美夕は『ほんまっ？』って聞きたかったんやと思っけど。

こりゃほつといたがええな・・・。

そんなわけで、事情を説明してウチは宮田きゅうだい兄妹と一緒に行くって
なったんやけど・・・

Mermaid 17

「あれっ？早乙女。どないしたんや？」

うんが悪いことに、橙哉さんが早乙女君を見つけちゃって・・・。

「あ、橙哉先輩。」

そこで先輩があっ、と何かひらめいたらしいんやけど・・・それが。

「そうやっ！早乙女、一緒に行かへんか？ケーキのバイキングやて。」

で、ウチは断るやろうと思っていたんやけど・・・

「いいっすね。行きますっ！俺、甘党なんで。」

行くことになっちゃった・・・

でも、なんかいつもと宮田先輩と早乙女君の様子がおかしいような気がするんやけど・・・

気のせいかな？

「おいしっ たまらんっ・・・」 「お兄ちゃん幼稚い」。 「わ、悪かったなっ！」

「うふふ、いいんじゃないですか？ 甘党ならたまらないでしょ？」

「おうっ！」 「やから幼稚なんや」

「うっせーっ！ だまっとな」 「ひっどー！ ちょ、唯架あ。なんとかいってーな。」 「そんな・・・」

こんな会話してて、早乙女は静かに紅茶を飲んで外を見ている。

「あ、早乙女。ちょっと来い。」 「へっ？ あ、はい。」

連れ出されていった・・・。

「なんなん？」
「えっ……知らへんの？」
「えっ？」

朱湮は「なんちゅうこつちゃ……」って顔して、ウチを見た。

「お兄ちゃん、唯架がスキなんよ?」

「ええええええええええええつ！！うそやろ？」

「ほんま。」

そ、それでっ？って聞いてみた。

「だから、あんたのことをスキな早乙女君とこの前手合わせしてまけたんやろ？」

「そういえば……」 「んで、そんなとき。賭けをしたんや。」

「賭け？」　「そ、負けたら潔く負けを認め、唯架には手を出さない。勝ったほうは」

「勝ったほうは？」

「唯架に絶対告白するっ！」

M e r m a i d 1 8 (前書き)

手合わせに戻ります。

Mermaid 18

「メー—ン!!」

おっしゃーっ!! 打ったぞ!

俺の手合わせの相手、早乙女一樹はサオトメホテルの御曹司であり俺の、剣道でもそして『恋』のライバルだ。

今回の手合わせ。

さっき、俺と早乙女はある約束を交わした。

『早乙女。』『なんすか?』

『今回の勝負、賭けをせんか?』『賭け・・・?』

『そや。負けたら潔く唯架をあきらめる。そして勝ったら。』

『勝ったら。』

『唯架を幸せにするんやぞ。』

「メーーーーーン……！」

ま、負けた……

これも運命、か。

唯架、幸せになれよ。

早乙女と一緒にな。

M e r m a i d 1 8 (後書き)

戻りましたね、やっつと！

次回、一樹と橙哉の会話を見逃さないでっ！

M e r m a i d 19

「なんすか、橙哉先輩。」

「おいおい、《なんすか？》やないやろ！！」

「うつ・・・」

ナゼだろう。笑ってしまうが、一樹は橙哉だけには弱い・・・

まあ昴は例外だが（汗）

「なんで唯架、あんな寂しそうな顔してるんや。」

「んな言われたって・しょうがねーってか？」

一樹は、はっとした。

「悪かったですね！唯架は、昔のことを覚えていない。何も、手出しのしょうがないんですよ！」

「ほーう。じゃあそれで引き下がるってか？」

「えっ・・・」

「だったら自分で唯架が思い出しそうな場所、探して一緒に行ってみればええ。」

そうしたら答えが見つかるかもしれへん。それもわからんのか？」

「できたら・・・俺だってそうします。でも、それはできません。」

そして橙哉の口から、決定的な一打とも言われるほどの鋭い言葉が発せられた。

「自分が何もしないからだろ。自分で動け、さもなければ・・・」

「俺が唯架をもらっ。」

一樹は、背筋がゾーッとするのを感じた。

M e r m a i d 1 9 (後書き)

短くてゴメンなさい(涙)

いろいろあつてですね・・・って言い訳にならないか。

とりあえず、次回から急展開とかあるかもしれません・・・

そのときはご了承くださいな(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560z/>

Mermaid princess ~ 初恋の相手 ~

2012年1月9日19時51分発行